

連載エッセイ 音楽学者のつれづれ

第5回 曆と音楽（その2）

永原恵三

前回は1990年代後半に秋田県鹿角市や青森県八戸市で行なった、伝統芸能の調査について簡単にお話しいたしました。伝統芸能は日本のあるいは世界の各地に伝承されている、その土地に独自の芸能で、さまざまな形態があります。音楽の点では楽器による囃子や歌、舞踊が含まれ、大規模な場合には山車（屋台）の運行をしながら地域全体を巡ることもあります。また、全体での行事の他に、各地区の集団で「門付け」をしながら家々を訪れていきます。都市の中心街でも一軒一軒の店を訪れて、ご祝儀をいただき、それに応じた演目を行ないます。この「門付け」は祭の行事のなかでは、大通りや舞台での行事を表舞台とすれば、むしろ裏舞台とも言えるでしょう。

こうした行事からそれぞれの芸能がもつ地域の人びととのつながりが見えてきます。これらの伝統芸能の催される日付は年中行事で決められています。だからこそ、「門付け」を楽しみにする人びと、大きな行事を楽しみにする人びと、など地元から観光客にいたるまで、「その日」を待ち望んでいます。と同時に、それらの芸能を担う人びと、つまり演じ手や囃子方、子どもから大人まで、その地域の各地区の人びとは「その日」に向けて稽古を積んでいきます。音楽や舞踊、さまざまな動きと人びとの配置など、祭りという年に一度の行事は、それを遂行するために地域の人たちがまさに共同体として活動する場です。

曆とはたしかにカレンダーの一つの場所にほかなりませんが、むしろ、その点に向かって、あるいはその点に収斂するためにその行事に関わる人たちが力を合わせて協力し、ともに歩むための方策を考えて努力を続けるという、大きなエネルギーの収束点である、と考えられます。つまり、曆というのはその共同体の外部者にとってはカレンダー上の一つの点にすぎませんが、内部者にとっては年間を通じてその共同体のエネルギーを収束させる場であり、今風に言えば、エネルギー・スポットになるのでしょうか。

さて、私は2020年頃から、キリスト教音楽（とくにカトリック教会の音楽）を音楽学研究における一つの事例として考え始めました。2020年というのはちょうど新型ウイルスの流行によって、あらゆる集団的な行動が制限されたときです。そのため教会は閉鎖され、ミサのために信徒が教会に集うことができなくなりました。しかし、その対応策として、さまざまな教会でインターネットによってミサ聖祭が全世

界に配信されるようになりました。ミサ聖祭がその場にいる信徒の人びとなどだけではなく、全世界の誰にでも公開されたのです。これはとても大きなことでした。ミサ聖祭の音楽、たとえば、ミサ通常唱（Kyrie、Gloria、Credo、Sanctus、Agnus Dei）などはミサ曲として多くの作曲家による作品が知られています。しかし、それがどのようにミサ聖祭という典礼と結びついているかは、別の問題でした。もちろん、キリスト教、とくにカトリックの地域であるヨーロッパの研究者たちにとっては、ミサ曲と典礼とは当然のように結びついています。

日本では状況が真逆であり、音楽自体はよく知られ演奏もされるのですが、典礼との関係は二の次だったかもしれません。とくに西洋音楽史の文脈では典礼という具体的な関係者の行動はとくに問題ではなかったように思います。そういう状況で、ある意味では民族音楽学によって、ミサ聖祭という行為としての典礼と音楽の関係が、音楽と人間との関係をさまざまな文化の文脈で考えるようになってはじめて、表面化したとも言えるでしょう。また、カトリックの側でも第二バチカン公会議（1962–65）によって、典礼もまた大きく変化したこともあり、信徒がミサ聖祭に「参加する」ことの重要性が示されたことにより、典礼と音楽との関係もまた、より一層考えるべきこととなっていました。

私自身については、カトリック教会の音楽は幼少期から接していたと思います。ミサなどの典礼には小学生の頃から祭壇奉仕者（侍者と呼ばれます）として、教会の内陣のなかにいました。小中学生の時にはオルガニストも務めていました。音楽を専門にするようになった大学院の頃からは、六甲カトリック教会聖歌隊の指揮者も務めるようになり、東京でお茶の水女子大学に勤務して以来は、聖イグナチオ教会（麹町教会）の土曜日聖歌隊の指揮者を務め、現在ではカトリック浅草教会で聖歌隊の指揮者・指導者とオルガニストも務めています。

こうした経歴からすると、キリスト教音楽を研究するには、あまりにも内部者であって、研究にはそぐわないという見方もできます。民族音楽学の用語で言えば、イーミックな視点が強く、エティックな視点が弱いということでしょう。しかし、それは国民の0.3%しかカトリックの信徒がない日本での話であって、欧米を考えれば、キリスト教の信徒であるのは普通のことです。

たとえば、ドイツ語で書かれた*Geschichte der katholischen Kirchenmusik*（『カトリック教会音楽の歴史』）の編著者であるカール・グスタフ・フェーレラーKarl Gustav Fellerer（1902–1984）は、ケルン大学名誉教授でカトリックの信徒であった人です。他方、現在（2025年11月）、放送大学東京文京学習センターの客員教員ゼミMクラスで講読している『音楽と言語』（*Musik und Sprache*）の著者であ

るトラシュブルス・ゲオルギオス・ゲオルギアーデスThrasybulos Georgios Georgiades (1907-1977)はミュンヘン大学教授として音楽学研究を行なっていました。ゲオルギアーデスはギリシア出身のドイツで活躍した音楽学者ですが、カトリックであるとは明記されていません。しかし、『音楽と言語』は副題として「ミサの作曲に示される西洋音楽のあゆみ」とあるように、グレゴリオ聖歌の成立以降現代に至るまで、各時代のミサ曲（ミサ通常唱に曲付けしたもの）をその言葉と音楽との関係を考察することで、西洋音楽史に流れる音楽的思考の変遷を理解する、という視点をもっています。

さて、暦と音楽との話に戻ると、キリスト教はカトリック教会、プロテスタント教会、東方教会、聖公会などに分かれてはいますが、ほぼ共通に持っているのが、教会暦（典礼暦）です。それらを比較することで、それぞれの宗派が異にしている考え方もまた見えてきます。詳細には述べませんが、たとえば、聖母マリアの記念日、キリストの聖体の祝日などはカトリック教会とプロテスタント教会との考え方の違いが表われています。こうした差異はありながらも、教会の暦は典礼の暦でもあり、今日のこの日が何の日なのかで、典礼のとくに朗読箇所は変化し、それにともなって歌われる聖歌も異なってきます。もちろん司祭の説教も異なります。さらに言えば、オルガンの演奏も同様です。

そのように一年の教会の営みを支えている典礼暦（教会暦）ですが、教会を中心とした多くの人びとの生活において、とくにキリスト教が中心になっている世界の諸地域においては、この暦が1年を通じてさまざまな節目として機能していると言えます。そしてさらに、これらの典礼暦に応じた教会の聖歌が固有のものであるがゆえに、聖歌という音楽を通じて、1年の巡りを、人びとの生活や文化に位置づけることができていることが分かりります。

私たちが住んでいる日本では、四季の移り変わりがはっきりしているのと、いにしえの時代から寺社の年中行事があつたり、二十四節気（小寒から立春や春分、啓蟄などを経て冬至に至る24の区切りの日）があつて、それなりに一年の巡りを理解したり、生活のなかに行事などで取り入れたりすることができます。しかし、キリスト教が中心となっている欧米などの地域では、また、四季が明確に変化しない地域などでは、典礼暦（教会暦）がより一層重要な生活の節目となったことが推し量られます。

その節目が来たことを人びとはどのようにして理解したのか、少し考えてみましょう。もちろん、いずれも太陰暦によっているので、つまり、月の満ち欠けに

よって月の何日にあたるかは判断できます。キリスト教の典礼暦（教会暦）も、基本的には太陰暦ですが、太陽暦で固定されている祝日と両方が併用されています。

以降はカトリック教会の暦に基づいて記します。キリスト教のもっとも大きな祝日は復活祭で次に重要な祝日が降誕祭です。まず太陽暦に基づいて固定されているのは、降誕祭が12月25日、聖母マリアの関連日、神の母が1月1日、聖母被昇天が8月15日、神のお告げが3月25日など、さらに聖人関連で各聖人の祝日や記念日、および諸聖人の祭日が11月1日、翌日が死者の日で11月2日などがあります。降誕祭は本来冬至の日であったのが、現在の25日になっていますが、夏至は6月24日でこちらは洗礼者聖ヨハネの誕生の祭日です。

それに対して、太陰暦に基づいているのがまず復活祭です。これは春分の日の後の最初の満月の後の最初の日曜日と定められています。したがって、3月の下旬から4月の中旬にかけて、毎年移動します。それにともなって主の昇天、聖霊降臨、三位一体の主日、キリストの聖体などの大きな祭日が毎週訪れます。その後、年間の主日が続き、11月の下旬に年間最後の主日（日曜日）が王であるキリストの祭日となり、この週をもって1年が終了します。そして翌週最初の日曜日が待降節第1の主日となって、新たな1年が始まります。

現在、この原稿を書いているのは、2025年12月でちょうど待降節にあたり、本年の降誕祭は12月25日の木曜日です。つまり日付は変わりませんが、曜日は毎年変わります。まさに冬至の前後となり、夕暮れになるのが早く、夜明けも遅くなっています。ほぼ毎日、ドイツのケルン大聖堂でのミサのYouTube動画を観ております。現地時間の朝8時からのミサの中継で、夜明け前の暗いなかでミサが始まり、閉祭の頃にはステンドグラスに朝日が当たって美しく輝きます。待降節のろうそくの4本目に灯がともり、まもなく降誕祭です。

ご関心のある方は、YouTubeの、DOMRADIO.DEで降誕祭のミサをご覧になってみてください。ドイツのカトリック圏での一つの中心であるケルン司教座大聖堂のライブ映像を観ることができます。日本の教会でもYouTubeでそれぞれ配信をしています。言語や音楽は異なりますが、世界中で同じ祈りが唱えられており、ミサの流れも世界共通です。カトリック教会が普遍教会と訳されるのはそういうことです。

（暦と音楽、終わり）